

# 愛知大学キャンパスツアー

佃 隆一郎

〈大学史事務室〉

## はじめに

新科目「大学史」リレー講義の目玉と位置づけて、開講初年度はシラバス『開講科目の紹介』で予告までしながらも、諸般の事情により実現に至らなかった「豊橋校舎キャンパスツアー」は、2年度目の2007年度には、各方面の意欲と協力のもとに、豊橋・名古屋（三好）両校舎とも実施することができた。以下、春学期（前期）の豊橋校舎で実施したいわば「自校舎ツアー」と、秋学期（後期）の名古屋校舎で実施した「豊橋校舎ツアー」について、順に報告した上で、担当者としての私の所感を述べてみたい。

## 春学期豊橋校舎での“自校舎案内ツアー”

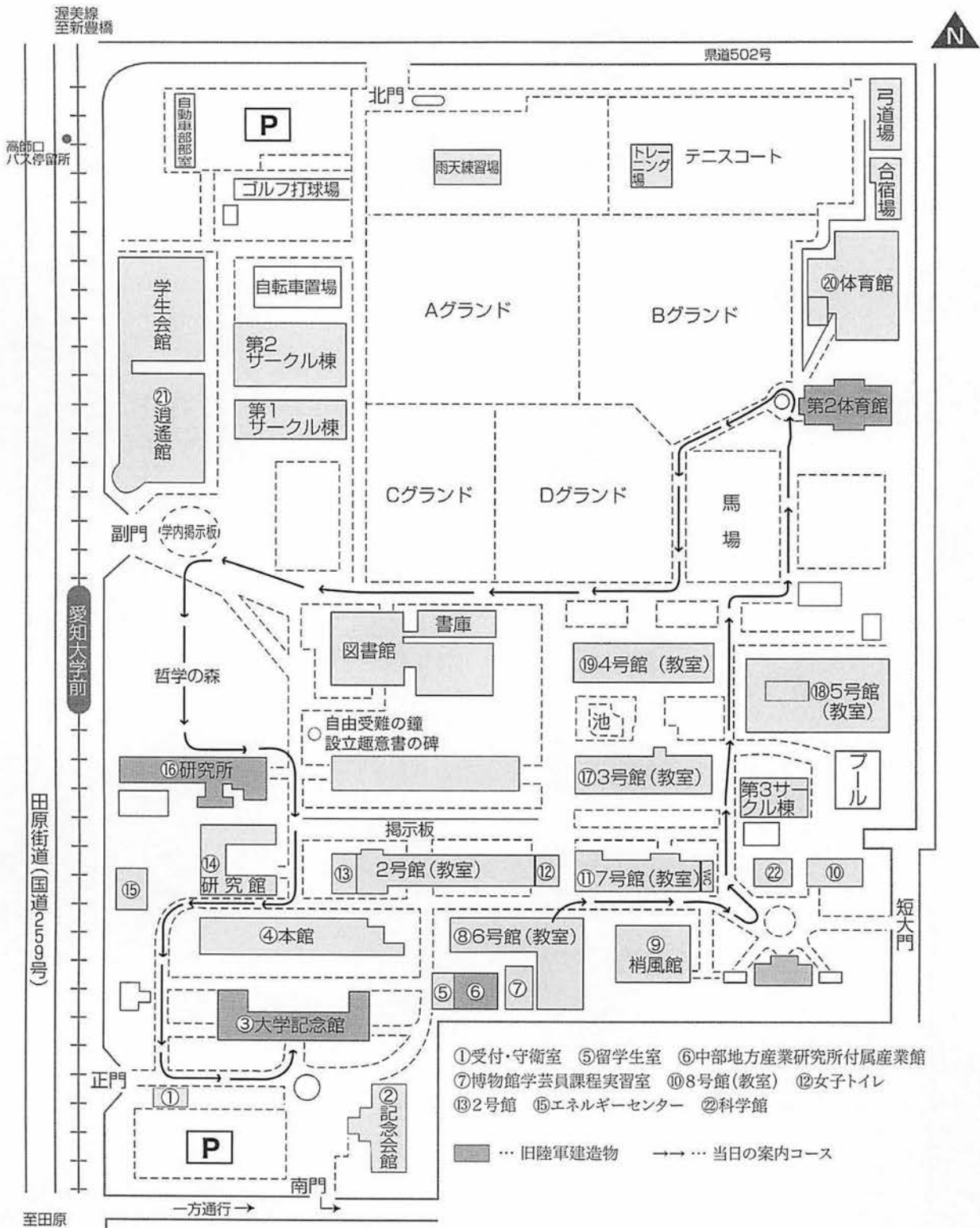
豊橋校舎では開講初年度となった、2007年度春学期のキャンパスツアー（別稿で先述したように、同じ豊橋校舎の学生が対象のため「ツアー」よりも「案内」と称すべきであったが）は、スケジュール半ばの第7講にあたる6月1日に、通常の曜日・時間帯で実施した。

当日は90分の時間を3等分した“3部構成”の形をとることとし、まず序盤の30分間は通常使用の教室にて、「今君たちがいるまち、豊橋」の歴史について、戦前・戦中の「軍都」としての側面を紹介した。これは「豊橋キャンパスは軍隊の敷地がもとであり、今も軍の建物が残っているが、そもそもなぜ軍が豊橋に来たのか。そして軍

と豊橋との関わりはどのようなものであったのか」という観点をまず学生に示して、学内に残る「旧軍施設」の存在を意識してもらおうとしてのものである（本愛知大学が豊橋の軍施設跡に創設されたことは、第1講「はじめに」で前もって私が説明）。その際資料レジメの配付も行なったが、資料には当時の豊橋地区の（軍敷地のウエイトの高さがうかがえる）地図を載せたほか、この年に井上靖氏原作の『風林火山』がNHK大河ドラマで放送されていたことから、同氏の自伝的小説『しろばんば』（新潮文庫版）での、父親が軍医として赴任していた「軍都豊橋」について述べた箇所も盛り込んでみた。

そのあと教室を出て、中盤の30分間にはキャンパス内を引率・一周する形で、学内の旧軍施設（一部遺構を含む）を順次紹介した。ルートは次ページの通り、教室のある6号館から、旧短大本館、第二体育館、研究所棟、教職員組合事務所と反時計回りのコースをたどって、大学記念館に至るものとした（その結果、産業館への立寄りは見送り）。このうち第二体育館については、前年にこれもNHKの連続テレビ小説『純情きらり』で、記念館ともども陸軍駐屯地でのシーンの撮影に使用されたこともふれてみた。

終盤の30分間は、到着した大学記念館で館内の東亜同文書院大学および愛知大学史の展示室（5室分）を観覧させたが、記念館内全体（の立ち入り許可区域）を自由にみてもらう形をとることで、館内のムードを感じ取ってもらうことにし



最初のキャンパスツアー (2007.6.1) でのルート  
 (愛知大学当局の案内図をもとに作製)

たため、展示の細かい説明は行なわなかった。もっとも、受講生（先述の通りこの年度はすべて1年次生）のうち経済・国際コミュニケーション両学部の学生については、同時期に「学習法」「入門ゼミ」という講義で展示室を参観し、東亜同文書院大学記念センター職員の説明を聞くことになった者も少なからずいたはずである。

豊橋校舎の受講生にはこのツアーにより、入学後まもないうちに（学生が普段行き来している場所からは少し離れた所にある）記念館とその周辺存在を知ったことにインパクトがあったようである。なお、当日の出席はカードの配付、回収の形で行なった。

### 秋学期名古屋校舎での「豊橋校舎バスツアー」

豊橋校舎（文、経済、国際コミュニケーションの各学部および短期大学部）と三好の名古屋校舎（法、経営、現代中国の各学部。ただし法学部3・4年次は名古屋市内の車道校舎）にそれぞれ所属している学生にとっては、両校舎間の交流が普段ほとんどないことから、一方の校舎を知らない（行ったことのない）まま卒業してしまうことになるのはむしろ普通であるようである。よって同じ愛知大学であっても、両校舎には学内の雰囲気のみならず、学生の気質や感覚にも相違がみられると私は思えるが、（だからこそ）「一方の校舎へ一度は行ってみたい」という希望を持っている学生は少なくないことは、初年度の豊橋校舎ツアーが実現しなかった際、受講生からのクレームが多かったことが示しているよう。

“約束”を果たすべく、2007年度は本腰を入れて実施することになった「名古屋校舎から豊橋校舎へのバスツアー」は、まず事前の実施通知から始まった。

#### ① 名古屋教学課による実施通知

ツアーの立上げは、黒柳孝夫教学担当副学長（当時）と名古屋教学課長の連携によって早期に具体

化を見た。

まず時期としては、名古屋校舎の学園祭が始まる直前の10月下旬～11月上旬（これもスケジュール半ば）に設定することになり、他講義に影響を来たさないように、原則授業のない木曜日午後を実施することにもなったことから、当該時期の木曜日にあたる11月1日に決定した。なお通常の本講義は金曜日であるため、この週は2日連続で「大学史」の時間が設定されることになった（翌日は今泉潤太郎名誉教授担当回）。

このように早目に骨子が固まったため、第2講にあたる9月28日（北嶋繁雄名誉教授担当。私もコーディネーター兼補助員として参加）の段階で、教学課が作成した実施通知及び参加登録の用紙（まとめて1枚）を配付することができた。その用紙を次ページに別掲することで、設定した実施要領について確認されたい。

#### ② 実施当日の状況

当日の2007年11月1日は、まず13時に名古屋校舎第一研修室に集合させることにしたが、同室がいささか見つけにくい位置にあることから、正面出入口（本館前ロータリー）にも集合させた。そのため、教学課各職員と私が研修室と出入口とで分かれて待機・案内にあたった。それぞれに集合した参加者を合流させ、待機させていた観光バス1台に乗せて13時20分ごろに正面出入口を出発し、途中名古屋校舎最寄り駅の名鉄黒笹駅に立ち寄り、校舎まで来る時間のなかった参加者を乗せた。そのあと東名三好インターチェンジから高速道路に入り、一路豊橋校舎に向かった。随行者は私のほか、教学課長と同課職員1名の計3名である。

やはり「豊橋校舎へは初めて」という参加者が多かったようで、車内の雰囲気は華やいでいた。豊川インターチェンジで一般道に出て、豊橋校舎にさしかかろうとした時、「愛知大学」の看板を見て「ここにもあるぞ」と歓声をあげた学生たちがいたことは、私にとって印象的であった。豊橋

総合科目01「大学史」豊橋校舎 キャンパスツアー実施要領

日 時 2007年11月1日(木) 13:30 (出発)  
 集合場所 名古屋校舎 第1研修室 (13:00集合)

1. スケジュール

- 13:00 集合
- 13:15 大学出発
- 13:30 黒笹駅出発
- 15:00 豊橋校舎 到着
- 15:10 豊橋校舎内キャンパスツアー  
 旧本館、情報メディアセンター、図書館など
- 16:30 豊橋校舎 出発
- 18:00 名古屋校舎 到着

2. 出席

授業への出席扱いとする。

3. レポート提出

11月16日(金)までに名古屋教学課窓口に豊橋校舎キャンパスツアーの感想などレポート提出すること。

4. 名古屋校舎 中央教室棟3階 第1研修室を集合場所とするが、黒笹駅を経由する予定ですので、10月15日(月)までにバス乗車場所を名古屋教学課まで必ず届けること。

===== 切り取り =====

年 月 日

学籍番号		氏名	
住 所			
携帯電話 (      -      -      )			
乗車場所 (該当する欄に○を付してください)			
名古屋校舎 (      ) 13:15発			
黒笹駅 (      ) 13:30発			
豊橋校舎 (      ) 直接、豊橋校舎に行く場合も提出すること。			

※個人情報については、この講義実施以外の目的には使用しません。

校舎の正門脇に駐車してもらったあと、同校舎で集合させた(豊橋地区在住の)受講生もいったん乗車させ、参加者(計33名)の確認を車内で行なった。

豊橋校舎には予定より早く到着したため、しばらく車内で待機させたが、その間に豊橋校舎側の

担当者との確認や案内の準備を行なった。春学期とは逆に、先に15時ごろより大学記念館内の展示室を参観させたあと、15時40分ごろより学内のその他旧軍施設を案内したが(ルートは春学期と同一)、展示室の説明は新たに東亜同文書院大学記念センターのスタッフの協力を得ることがで

き、愛知大学史展示室に増設されたばかりの本間喜一コーナー（展示室）は越知専客員研究員が、同文書院関係は武井義和ポスト・ドクターが、それぞれ熱く歴史のエピソードを披瀝した。

学内を回って記念館前に戻ってから、16時20分ごろより豊橋校舎応援団が学生歌やエールを参加者に送る“儀式”がとり行なわれた。これは黒柳副学長と越知客員研究員の熱意と連携により実現したものであり、参加者に大きな感動を呼び起こした。予定通り16時30分にバスに乗車し、名古屋校舎に18時ごろ到着して解散した。

（このツアーについて記した越知氏の寄稿が3週間後の11月22日、地元紙『東日新聞』に掲載された）

### ③ 実施後の感想文提出

また、実施通知の用紙に記した通り、後日（学園祭による休講期間終了後）参加者に「キャンパスツアーの感想レポート」を名古屋教学課まで提出させた（その後関係各所に回覧）。

レポートで記されていた事象は、“もうひとつの愛大”としての「豊橋校舎」、前身校としての「東亜同文書院」、創設者としての「本間喜一」とに大別された。それぞれに関する代表的な記述を、ツアー全体の感想も併せて〔付表〕にまとめたので参照されたいが、参加者の全般的な反応としては、「普段の学内での生活では知りえない“愛知大学のさまざまな顔”を今回知った」と感じ、印象に残した者が多い傾向があったように思える。

もともと、豊橋校舎について「自分たちの名古屋校舎より広い」と感じた者が結構いたような、事実とはいささか異なる認識（両校舎とも総面積は約20万平米なのであるが、豊橋は建物が分散、名古屋は集中している形になっていることからそう“錯覚”したのであろう）が見られた点は是正させなければならないが、参加者にはこれを機会

により広い視野に立って、卒業までの学生生活を積極的かつ有意義に過ごしてもらいたいものである。

### おわりに

本『愛知大学史研究』の創刊号の拙文（25ページ）で、「大学史」を講義科目に組み入れるようになった大学が近年増えてきていると記したが、その一つとして例えば（旧帝国大学の）九州大学では、国立大学法人化以前の1998年度から、他キャンパスへのツアーを含めた「大学史」講義を実施している。

その初年度の報告書『試行授業「九州大学の歴史」に対する学生の反応について』（新谷恭明・折田悦郎編）で、報告文の締めくくりに引用されている一受講生の言葉「やはり自分の通う学校のことぐらいは知っていた方がいいに決まっている。」（10ページ）と、本学での今回のキャンパスツアー感想文の一編の末尾にあった「自分の通う大学を知ることは、当たり前で必要なことだと感じた。」（経営1年男子）との記述とは瓜二つである。偶然の一致にせよ、まさしくこれは、「大学史」講義の意義目的（受講生に何を気づかせるか）のエッセンスといえるのではなからうかというのが、担当者の私としての感想である。また、単なる「仕事」を超えた協力を下さった、越知研究員や武井ポスト・ドクターをはじめとする各関係者に、衷心より感謝の意を表する次第である。

2008年度のキャンパスツアーは、春学期の豊橋校舎では「キャンパス案内」と実状に即した呼称に改めた上で、日程を繰り上げて4月25日に、07年度と同様の形で実施した。秋学期の名古屋校舎では、やはり木曜日である10月30日に実施する予定である。（2008年6月記）

〔付表〕 2007年度秋学期「豊橋校舎キャンパスツアー」参加学生の主な感想

(内容別に抜粋。文中の「(…)」は中略を、「/」は改行を詰めたことをそれぞれ示す)

豊橋校舎に関する主な感想

<p>豊橋校舎の大学記念館を見て、ドラマのロケに使われたことに納得した。木造2階建てのレトロな建築物が、周囲の樹木と調和して独特の雰囲気を出している。作り物ではない。1世紀を見つめてきた「生き証人」であるからこそであろう。/ (…) 渥美線の駅が敷地に隣接しているのを見ると、名古屋校舎の学生としてはうらやましく思う。豊橋校舎の敷地は高低差がないためか、校舎からどこへ行くにも坂を上り下りしなければならぬ名古屋校舎と比べてゆとりがある。愛大の「本部」と呼ぶにふさわしい。/ (…) 大学記念館に入ると、内装は意外と趣向を凝らしているというのが最初の感想だった。(…) 所々に趣向を凝らしつつ、派手さを感じさせない適度な重厚感を感じさせている。記念館として公開されているのも頷ける。 (法1年男)</p>
<p>豊橋キャンパスに行くと、まず初めに驚いたのは愛知大学前という駅があることと、キャンパスの敷地の広さだった。名古屋キャンパスしか知らない自分は、豊橋キャンパスを見て愛知大学の大きさと歴史を思い知り、私はこんな大学に入ったのだと改めて感じた。明治の面影を残す木造の大学記念館や第二体育館など、見るだけで歴史を感じさせるものがたくさんあった。(経営1年女)</p>
<p>まず、何とんでも大学の広さに圧倒された。(…) /そして大学記念館がなんとも言えない昔の面影を残した造りになっていて、その外観もさることながら、中も昔に戻ったかのような感じになった。あそこだけほんとに不思議な空間だった。/記念館内は、昔の教科書や制服などが展示されていて歴史を感じた。とても貴重なものばかりが置いてあった。/これを機会に車道にも行きたいとおもった。(経営1年男)</p>
<p>第一印象にとっても大きいという驚きだった。中はとてもキレイで伝統のある学校に見えた。/愛知大学の歴史が保管されている記念館に入ると、外とは違い、神聖な雰囲気がただよっていた。書物など、大切に置かれていて、過去にあった出来事などが詳しく書いてあり、昔の状況などがよくわかった。(経営1年男)</p>
<p>(大学記念館の一編注一) 他にもキャンパス内を回ったが、昔ながらの建物に加え、草木が多く、どこか素朴な感じのする印象が強かった。私の地元もどちらかと言えば、都会という方ではなく田舎よりだったので、見学していて懐しい感じがした。(経営1年男)</p>
<p>愛知大学豊橋キャンパスへついてまず驚いたのは、大学の大きさだった。名古屋キャンパスよりとても大きく見え、これが本当の大学といわんばかりのキャンパスだった。大きさだけでなく、学生たちの様子、はり紙などの活動など、名古屋キャンパスにない愛知大学だ。/大学記念館などの旧校舎には驚かされました。タイムスリップをしたかのように思えるほど古そうな建物の教職員組合事務室(産業館の誤りか一編注一)は、いかにも壊れそうであった。大学記念館はまだペンキがおうほど新しく、古いものが新しくきれいだという矛盾があったが、ここで愛知大学の説明を聞けてとても良かった。(経営1年男)</p>
<p>今回はじめて豊橋キャンパスに行くとまず思ったことは、広い!! ということです。それに記念館があることにも驚きました。いくつか古い建物もあり、三好キャンパスでは味わえない歴史を感じることができました。/対照的にとてもきれいな建物もありました。ビジネスビルみたいにガラス張りが高かったです。中に入れなかったのが残念です。/ものすごく古いトイレやシャワー室や開かずの扉など、不気味なところもありました。いろんなところを見て回り、いろいろ発見して楽しかったです。(経営1年女)</p>
<p>今回のキャンパスツアーの中でまず最初に感じたこと、それは同じキャンパスの中に歴史ある建物と近代的な建物が入り交じっていることに対する驚きです。最初は雑然とした印象を受けてしまったのですが、慣れてくるとその光景が愛知大学の歴史そのものを表しているような気もしてきました。自分としては、名古屋キャンパスよりも豊橋キャンパスのほうが大学らしさを残しているという面で気に入りました。 (経営1年男)</p>
<p>豊橋校舎に着くまでに、車窓から見ていて印象に残ったのが、路面電車と愛大前の看板でした。愛大前の看板に関しては、少しうらやましい気がしました。豊橋校舎の印象は、いろいろな種類の木々があり、自然豊かで、新旧の建物がうまく調和しているように感じました。(経営1年男)</p>
<p>長い歴史を持っている豊橋キャンパスには、いまでも現存する創立当時の建物があります。明治の面影を残す木造2階建ての大学記念館(旧本館一原文一)をはじめ、豊橋キャンパスには日本近代建築史の証人とも言うべき建物が現存している。鬱蒼とした樹木にとけこんで懐かしさに満ちた建物にも目を向けてみたいです。 (現代中国1年男、留学生)</p>

## 東亜同文書院に関する主な感想

東亜同文書院。これが愛知大学の前身の大学である。それは上海にあり、全国各都道府県からその知事の推薦により、入学できる大学である。当時、陸軍士官学校などと同じくらい人気があったそうだ。学校というものへの執着心のようなものは、今の私たち学生よりも数段あったと感じられる。また、そのような学生の勉学に対するまじめさはほかの面でも見られた。「念書」という中国語の勉強である。(…)学生たちは一日何時間も中国語の発音に費やしていたそうだ。その際に朝早くから学生たちで集まって、上級生がお手本となり、中国語を練習していたそうだ。今の私ならめんどくさいなどと言い、だらだらとしてしまうだろう。たとえ私が当時、現地に行っていたら喋れるように努力するしかないが、その過程での努力の仕方に脱帽する。今の大学生の講義を受ける態度は、あまり静かではない。講義をサボる人もいるくらいだ。東亜同文書院の学生の勉学に対する姿勢は、大学進学が当たり前になっている現代の大学生(…)とは比べ物にならないと実感した。今の自分の大学生生活を振り返り、後ろめたく感じた。(法1年男)

東亜同文書院については(…)詳細を知る機会はあまりなかった。しかし、今回のキャンパスツアーで大学記念館において東亜同文書院の展示室を短い時間ながら見学できたことは非常に良かった。特に、東亜同文書院が誇る大旅行の報告書は、はるか昔の先輩方が残した偉大な学業の成果であり、現代の大学生として見習うべきことも多い。現在の大学では、フィールドワークやインターンシップのような実地活動の重要性が盛んに叫ばれているが、東亜同文書院では数十年以上前から大々的にこうした活動が行なわれていて、そのような学校で学んだからこそ、卒業生の方々が日中両国で活躍されたのだと思う。(法1年男)

(大学記念館の一編注一)中には愛知大学の前身ともなった東亜同文書院大学の資料・軌跡が残されており、みる度に目を凝せられたと思います。中国への旅は歩くだとかで、今の学生には勉強の為にそこまで根性がすわった事ができるのかと思うくらいまでの資料がありました。彼らは、お金がないのに中国へ行き、そこで働いている先輩などをアテにして、旅をしたと聞いて、食欲になるべきだと思われました。(経営2年男)

(19世紀末一編注一)当時「日清戦争」があり、日本がこの戦争に勝利したことから、中国を目下と考えてしまった。このことから日中関係が悪化していったそうです。それを近衛篤磨氏が友好関係をしっかりとしようとして、東亜同文書院の設立にいたったのです。／しかし、今の世の中の人ですら中国の方を批判することがあるのに、当時この思想の中で日中友好関係を結ぼうとするのには、相当な努力が必要だったのではないかと。／まず初めに日中友好関係に必要なことは何だろうか。と考えた時、それは「言語」である。言葉がわからなかったら、友好関係も何も始まらない。当時の学生たちは、朝から晩まで中国語を勉強していたそうです。(…)文を丸暗記することで中国語を覚えたそうです。そして朝5時から後輩が先輩に発音を教えてもらっていたので、周りの人からはカラスが鳴いていると言われたそうです。(経営1年男)

(東亜同文書院の一編注一)学生達はそれぞれ「調査報告書」を作成して、それが卒業論文となっていたことが驚きです。いずれも中国の実態を知る資料として貴重なものになっています。僕らの大先輩にあたる人達が歴史の参考になるようなものを作成し、世界に貢献していたと思うとすごいです。／また、当時は毎朝学生達が集まり、外で中国語の発音練習をしていたというエピソードを聞いた。それだけ、当時の学生が日中交友に努めていたことがうかがえる。そういう気持ちは見習わなければならないと思った。／いずれも、この記念センターでは現代の日本や中国および両国関係を解明する多くの視点を提供してくれた。(経営1年男)

愛知大学の現代中国学部がすごく力を入れているのも、東亜同文書院大学の頃からの影響が強いのだと感じました。／当時の学生たちは休み時間や朝、授業後にも中国語の勉強をしていて、非常に熱心な姿勢に心うたれました。／また、今でも学籍簿や成績簿が残っているのには驚きました。さらに驚かされたのは、その資料は、自分たちの荷物を捨ててまで持ち帰ってきたことです。その資料を置いて帰れなかった先生や学生たちの思いに感動しました。(経営1年女)

(東亜同文書院の一編注一)日本人学生は中国語を学ぶために、毎朝、中国語の発音の基本となる「má má mǎ mǎ」を大声で練習していたので、それが「カーカーカーカー」とカラスの鳴き声に聞こえたというのがおもしろかったです。でも中国の大学で学ぶというのは並大抵の事ではなかったと思います。「学籍簿」「成績簿」は、日本敗戦の翌年に大学を引き上げる際、自分たちの荷物よりも優先させて持ち帰ったもので、現在は愛知大学以外では保管されていないと聞き、貴重な物を見せてもらったんだと、あらためて感じました。(経営1年女)

大学記念館では(…)勉強になりました。特に現代中国学部が現在も行っている現地プログラムが、東亜同文書院時代に行われていた大規模な現地調査に由来しているという話には非常に驚きました。また、その際の調査結果が現在も貴重な歴史資料として現存し、当時の中国を知る上で役立っているというのも、愛知大学の学生としては嬉しいことであると思いました。(経営1年男)

## 本間喜一に関する主な感想

<p>愛知大学におけるさまざまな出来事に触れて、私は本間喜一という人物の偉大さを知った。本間喜一学長は、弁護士、東田同文書院での教授、裁判官での活躍をへて、愛知大学長になった。特に本間喜一学長の偉大さを知ることができるのは、愛大事件と薬師岳遭難事故である。本間喜一学長は、「学生は私にとって3親等以内のもの」といい、学生の弁護に努めたそうだ。今の教員の中には生徒にセクハラやわいせつ行為、いじめへの加担などどうしようもない人もいる。そんな中で、学生を大事にする本間喜一学長の思いは、この大学に入学してよかったと私を思わせた。こんな素晴らしい人が自分の大学の学長だったと知れて、感動を覚えた。薬師岳遭難事故でも本間喜一学長は、「生命は地球より重い」「学生は宝である」といい、人命救助に全力をあげた。結果的には最悪となったわけだが、私は本間喜一学長の人としての器の大きさを知ったのと同時に、「生命は地球より重い」という言葉が心に強く残った。（法1年男）</p>
<p>本間喜一先生の話をかきされ、先生が思っている事が、今の愛大に反映されているかと言ったらそうではないと感じ、とても残念だと思いました。先生の熱意は学生の学問の自由を何事にもいかなる時でも優先されているような感じでした。愛知大学という学ぶ場所では、昔警官がのりこんで逮捕された時、本間先生は学問と学生に対する行動をすばらしい言葉で弁護してくれたのを聞いて感動しました。今回豊橋校舎に行った事で、僕は学問に対する自由と良さを学びました。（経営2年男）</p>
<p>（薬師岳遭難事故での本間学長の一編注一）信念と方針は間違いなく周りの心を動かしただろう。生命の大切さを思い、学生を大切にするという真情が愛大人全体の心であったというのはとても素晴らしく、暖かいものだと思った。／先生は教育者というだけでなく、弁護士でもあった。しかし学長就任後は本当に愛知大学に全てをささげてください。愛知大学の歴史の中で、尊敬する人物は彼だけではないが、このような素晴らしい大学を創立し、成長させてくださった先生方に感謝をし、その大学に在籍していることをこれ以上に誇りに思いたい。（経営1年女）</p>
<p>今の愛知大学が成り立っているのも、本間喜一のおかげであると言っても過言ではないと、私は考える。また、1952年に起こった「愛大事件」の発生に際して、これに本間喜一が関わっているのだが、ここで彼が示した姿勢は、「学生は私にとって親族である」と言っていたように、学問と学生に対する誠実さに溢れるものであった。／記念館にある本間喜一の一室に、大きな写真が展示してあるが、その写真から感じとれる風格や、掴むにも掴めないようなオーラのようなものに感動したのを覚えている。（経営1年男）</p>
<p>一番感動したのは本間先生の姿勢です。学生を大切にする姿、信用する姿、熱心に取り組む姿…。愛知大学を思う気持ちが誰にも負けてないと思った。／ここまで愛知大学を愛した人が他にいるだろうか。自分が通っているこの大学に誇りをもてる気がしました。（経営1年女）</p>
<p>林毅陸学長や本間喜一学長、小岩井浄学長の3人の偉大な学長の話は印象的であった。特に本間喜一学長は、二度と名前を忘れないほど頭に残った。（…）学生を何よりも大切にして、人の上に立つ人間として素晴らしいと思った。やはりこういうことをやれば、周囲から理解と信頼を得ることができるのだと再確認できた。（経営1年男）</p>
<p>本間喜一学長はすごく立派な人だと思いました。愛知大学に日々尽力をされ、愛知大学事件では「学生は私にとって三親等以内のもの」と、学問と学生を守るため（とった一編注一）毅然たる姿勢は、学生を信じ、誠実さあふれるものでした。薬師岳遭難事故では、自ら責任を負い辞任し、「命は地球より重い」「学生は宝である」という、生命の大切さ、学生を大事に思う心に私はとても感心しました。愛知大学が今も絶えず築いているのは、土台をしっかり造りあげた本間喜一先生のおかげだと私は思います。（経営1年女）</p>
<p>キャンパス内に植えられていた（なんじゃもんじゃの一編注一）樹にも“議論して思考を深めてほしい”“隙間から射す光のように温かく見守ってほしい”“よりよい愛知大学へ導いてほしい”など多くの思いが込められていた。樹にまで思いが込められているとは思わなくて驚いたが、とても温かい気持ちになった。また、本間喜一先生の偉大さも感じた。同僚や後輩、学生たちを思う気持ちが人一倍強かったのではないかと思います。（経営1年女）</p>
<p>豊橋の先生が本間喜一さんについてもすごく熱弁していたけど、本間さんの活躍をみると熱弁したくなる気持ちがわかります。学生の育成に熱意をもち、素敵な信念をもち、暖かい人柄である本間さんが設立した大学に通っているということが、とても誇らしく思えました。弁護士にも就任した本間さんが創立した愛大だから、愛知県内で法学部の質のいい大学と言われているのかなと思いました。（経営1年女）</p>
<p>創設者である本間喜一先生は、最高裁判所の事務総長を務められた立派な方で、早稲田の大隈重信や慶応の福沢諭吉、同志社の新島襄と引けを取らない大先生だと教えられました。そう考えると、本間喜一先生が創立者であることが、誇らしいような気がします。（現代中国1年男）</p>
<p>もし、本間喜一学長がいなかったら、今の愛知大学はないと言える。本間喜一学長のために愛知大学はその困難な時期を越えて、今まで成長してきた。だから、我々は今愛知大学で勉強できる。「ここで、本間喜一学長に心から感謝します。」（現代中国1年男、留学生）</p>



## キャンパスツアー全体に関する主な感想

今私がこの講義を勉強する理由は、本間喜一学長をはじめたくさんの立派な方々が築いた愛知大学の精神を学ぶことである。また、東亜同文書院の学生に負けないように勉強していきたい。そんな気持ちで大学生活を送りたい。今回のキャンパスツアーに参加して、今後の自分にかせられるものを得たと感じている。(法1年男)
自分が学んでいる大学がどのような背景を持つのかを知ることは学生にとっても有益だと思う。自分の大学の「カラー」を知ると、普段の講義にも奥行きを感じることができる。何気なく履修登録をした大学史であるが、1年次にこの科目を履修して今回のキャンパスツアーに参加できたことは非常に幸運であった。大学生活は残り3年余りであるが、このキャンパスツアーで見たこと、知ったことを忘れずに、愛大生の名に恥じぬよう多くのことを学んでいきたい。(法1年男)
私は豊橋出身で今も豊橋から通っています。／地元ということもあり、愛知大学の豊橋校舎にはオープンキャンパスや文化祭、本を借りに行ったことも何度かあり、何回か入ったことがありました。／でも、東亜同文書院大学記念センターや総合郷土研究所・中部地方産業研究所には初めて入りました。(…)豊橋校舎のことは知っていると思っていましたが、私が知らないことをいろいろと学ぶことが出来、良かったです。(経営2年女)
今回の豊橋校舎キャンパスツアーに参加できたことで、様々なことを学び、感じることで非常によい経験となった。今回参加できなかった友人などにも伝えたいと思った。また機会があれば豊橋キャンパスを訪ねてみようと思う。(経営1年女)
豊橋の校舎に行き、自分の知らない愛大のことを知りさらに好きになった。まだまだ知らないことがたくさんあるだろうから、また豊橋に行きいろいろ知りたいと思った。／そして自分の大学にもっと誇りを持ちたいと思った。(経営1年男)
今回、豊橋キャンパスに行ってみて、自分が通っている大学である愛知大学に対する考え方が大きく変わりました。こんなに長い長い歴史があるなんて初めて知ったし、本間喜一さんや林毅陸さんの大きな努力がなかったら、愛知大学は誕生していなかったのかもしれない…。そうしたら今自分の周りにいる友達にも出会えてなかったかもしれない…。そう考えると本当に本間さんや林さんに感謝です。このようにとても長い歴史を持った愛知大学の学生であることを、とても誇りに思います。これからはこのような素晴らしい大学の学生として、恥ずかしくない行いをしていこうと思いました。(経営1年女)
今回豊橋キャンパスツアーに行ったことによって、愛知大学の歴史の偉大さに気付かされました。(…)愛知大学はこれからもっとすばらしい大学にしなければならないと、今回のツアーで思った。それには学生一人一人の日々の努力なしには実現しないことなので、これから自分を限界まで磨き上げたいと思います。(経営1年男)
名古屋と豊橋とでキャンパスが離れているのに、つながりが深いと感じた。名古屋校舎の学生を温かく迎え入れてくれ、訪れた側の自分も気分が良かった(豊橋キャンパスの先生方や、応援団の方々の接待など一原文)。自分の大学の歴史を学ぶことで、今の大学が現存し、自分が進学、在学できることのありがたみを知った。その意味では、今回のキャンパスツアーは自分にとって多くのプラスとなった。(経営1年男)
今回の豊橋キャンパスツアーを通して、多くの事を学ぶ事ができました。中国との関わり方の事、事件の事、このツアーや授業を受けていなければ、全然分からなかった事です。実際に豊橋校舎に行き、話を聞き、愛知大学の魅力を知り、愛知大学がもっと好きになりました。／大学の歴史は、なんだか身近な歴史に感じて、学んでいても楽しかったです。これからも、先生方の話を聞いて、様々な事を学んでいきたいと思います。(経営1年女)
今回のキャンパスツアーを通して、今まで知らなかった愛知大学の歴史や、普段は見られない愛知大学の一面を直に体験することができ、充実した一日になりました。また、その中で愛知大学の一員としての誇りと自覚を改めて確認することができたのではないかと思います。(経営1年男)
このキャンパスツアーは力の入れがとて強いことを改めて実感しました。／現在この記念館にある書物は中国だけでなく、世界各国が注目していることに驚きました。私はそんな愛知大学に入学し、私も現地プログラムのような愛知大学でしかできないことを学び、それをこれからの人生で役立てていけるようにしたいと考えています。私はこの講義で歴史だけでなく、本間喜一のような人物の考えを知ることができて、今回の講義に来てよかったと思いました。(現代中国1年男)

〔注〕 各項目ずつ、学部(法→経営→現代中国)、学年(2年次→1年次)、学籍番号順に掲載(学部の順番は本学の通例上のもの)。

同一学生の感想を複数掲載したものも生じたが、あくまでも内容に基づく選定の結果であって、学部・学年・男女(表記したのは参考としてのもの)・国籍・個人の別による作意はない。